

入選

坂本 恵美(さかもと めぐみ) 八王子学園八王子中 3年生

作品名: 自分について

図書: 奇跡のリンゴ「絶対不可能」を覆した農家木村秋則の記録

植物を育てるのに必須といってもいいであろう農薬。それを使わずにリンゴを育てることなんて「絶対不可能」である。その常識を覆した農家、木村秋則さんは何故、どうやって不可能を可能にしたのか。私はこの本のサブタイトルの「絶対不可能を覆した」という言葉に惹かれてこの本を読んでみた。

まず、私が思ったことは、「この人は自分とは違う」ということだ。もちろん同じ人間などいない。でもこの人は明らかに違うと思った。例えるならば、木村さんは肉食、私は草食といったところだろうか。何故そう感じたのか。それは木村さんの一つのことに對する姿勢や熱意が、自分とは比べものにならないほどのものだったからだ。私はいつからか、上手な手の抜き方を覚えてしまったらしい。行動を強いられたり、せざるをえなくなる一歩手前で行動しはじめ、やらなければいけないところまではやるが、それ以上はやらない。そんな生活をしてきたため、全部微妙。自覚はしているが、改善するのはなかなか難しい。しかし、この本を読んで、やはり自分は変わらなくてはいけないのではないかと真剣に思うことができた。

そもそも、木村さんは何故農薬を使わないリンゴをつくろうと思ったのか。それは、農薬に過敏な妻の為である。数十年間リンゴを育ててきた木村さんにとって、無農薬のリンゴをつくるというのは人生を狂わしかねないようなことだったと思う。そこで一人の人を想った決断ができる木村さんはとても強い人だと思う。私なら、安牌を選んで今まで通りリンゴを育てるだろう。臆病だから。

本の冒頭で、著者は「木村さんはよく笑う」といっていた。木村さんは自分自身を「バカだから」とよくいっていたらしい。木村さんは自分のことをよくわかっている。別に私は木村さんはバカだといいたいわけではない。ただ、自分の人生の残りを全て賭けるような挑戦をするなんてできるだろうか。無理だ。大体の人は多分、自分自身のことをよくわかっている。性格や口癖は自覚していないことの方が多いだろう。ある日、友達に言われて気づいたことはたくさんあるのではないだろう

か。ただ、この本を読んで私は、木村さんは自分をよく知っていて、それを曝けだす勇気ももっていると思った。周りによく笑う人はいるだろうか。私自身、よく笑う方だと思っている。しかしそれは自分の弱さを隠すための笑顔だと最近気付いた。弱い自分に気付いてほしくない。そういった思いから明るく振る舞い笑うことが多いと思う。それに対して、木村さんは自分を曝けだすための笑いなのではないかと根拠はないけど感じた。

木村さんはリンゴの開発をしている間、無収入という生き地獄を経験している。その貧乏生活に耐えられなくなり、自殺も図ったという。結果的には、自殺しに行った山で一本のリンゴの木に出会い、無農薬のリンゴをつくりあげたのだが、自殺を図るまでに、木村さんはいくつもの自分と向き合い、真剣に考えただろう。そういう機会はとても大切だと思う。別に、貧乏生活を一度体験したほうが良いということではなく、自分が置かれている状況やこれから何をすべきか、何ができるのかを考えることである。これは、自分が何者で、どの立場にいるのかを再確認するためには必要だと思う。ただ考えるだけでなく、それを理解した上で行動、発言をすることによって、身の程知らずにならずに社会にとけこんでいけると思う。

私は、この本を読みながらいろいろなことを考えた。普段の何気ない行動は果たして、自分にとっていいものになっているのか。今自分が覆したい不可能、そんなものはあるのか。そんなことを深く考えたことのない私には、答えを見つけ出すのは困難なことだ。いまだにじっくりくる答えは見つかっていない。しかし、それでいいのだと思う。本当にやりたいこと、生涯ずっと一緒にいたいと思える人、大切なことを将来見つけたときに、自分を把握し、一生懸命そのために尽くしていればきっと道はひらけるだろう。流石に木村さんのように、一つのことに狂えるような度胸も根性も自分にはない。しかし、一步、踏み出すタイミング、歩幅を間違えなければ、この先何があってもなんとかなるのではないかとこの本を読んで思うことができた。